

1/29(土)まで！ 倫理号です。1月も残り所僅かとなります。梅の夜の便にも
干杯。この目に見える「純粋な心」が、あざやかなスタートを切れるか！

今週の

倫理

1月のテーマ | あざやかなスタートを切る

志を運ぶアホ一鳥

2022. 1. 29～2. 4

1266号

仕事や事業に限らず、何事においてもスタートが肝心といわれます。「〇〇をしよう」と気づいた瞬間が、物事を処理する最高のチャンスで、あざやかなスタートを切ることが成功へと導いてくれるのです。

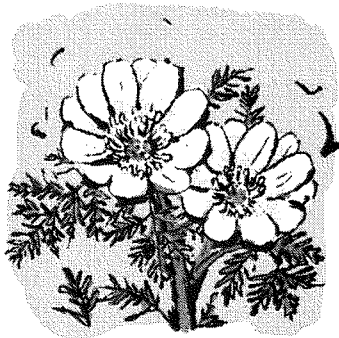
しかし、実際には、なかなか取り掛かることができず、面倒がつて先延ばしにしてしまふよう。また、思い通りの結果が得られなかったために、「挑戦するんじゃないか」と後悔することもあつたかもしれません。

では、どういった心持ちで物事に取り組めばいいのでしょうか。倫理研究所を創設した丸山敏雄は、純粋倫理の実践の要諦の一つに、「純粋（スナオ）」を挙げました。

心のあらゆる余計な雑念を捨て去り、澄んだ心で事に当たるのです。目の前のしなればならないことに対して無駄なことは何も考へない。付け加えたり、割引いたり、疑ったりしない。余計な憶測や想像を働かせず、ありのままの無色透明な心で臨むのです。

余計な思いや考えなど、雑念に囚われるのは「今」を生きていないところから起こります。「〇〇をしよう」と気づいたとしても、今ではなく、過去や未来に囚われ、チャンスを逃してしまふことがあります。すると、それが悪循環となり、できなかつた自分を責めて、「どうせ自分には無理だ」と最初から挑戦する意欲がなくなり、いつまで経つてもスタートラインに立てなくなるのです。

国際日本文化研究センターの教授である磯田道史氏の著書に『無私の日本人』があり



「純粋」な心が スタートの足取りを 軽くしてくれる

ます。この本には、江戸に生きた三人の清冽な日本人の人生が描かれており、その中に穀田屋十三郎という庶民の話があります。

当時、仙台藩吉岡宿は年貢が重く、破産者、夜逃げが相次いだ町は、どんどんと寂れていきます。そんな町を立て直すべく、十三郎は仲間と協力して奔走します。私財はもちろん、命さえも捨てる覚悟を持つて挑みましたが、度重なる苦難によって、打ち首寸前になってしまいます。それでも十三郎は挫けることなく、「今」できることを探し出し、実行していきます。そして、最終的には藩にお金を貸し付けて、その利息を毎年、住民に配るという前代未聞の金貸し事業を成功させたのです。

十三郎が何度も窮地に追い込まれたように、その時はベストと思つて実行したことでも、上手くいかないことがあります。原因を追究し、同じ失敗をしないよう対策をとるのも大切ですが、過去に囚われていては前に進めません。（過去の失敗があつて、今があり、未来が作られる）と受けとめ、（今、何ができるのか）と前向きに考えてみましょう。きつと、様々な「気づき」が浮かんできます。そして、十三郎のように決意と覚悟を固めて、スタートを切れば、やれないことはありません。

私たちも万が一、過去に大きな失敗をしたとしても、スタートを恐れることなく、「今から再スタート」と雑念を捨てて、実行に移した時、未来が明るく見えてくるはず。今に目を向けて、（今日も明日も、自分の手で作れるのだ）という気概でスタートを切る時、すでに未来は変わっているのです。